

# 万能<sup>すぎる</sup>創造スキルで 異世界を強かに 生きる!

Bannousugiru  
Souzousukiru de  
Isekai wo  
Shitataka ni Ikiru

緋緋色兼人  
Hihiro Kaneto

4

いするぎ まな み  
**石動愛美**

彩花らと共に地球から召喚された少女。  
守備に特化した能力を持つ。

**リサ**

ルイの両親と冒険者  
仲間だったエルフ。  
現在はどこかに  
封印されている。

**アイリ**

かつてルイの家に  
仕えていたメイド。  
現在は冒険者として  
仲間に加わっている。

てん どう あや か  
**天童彩花**

ルイの地球での幼馴染。  
恋人の一人として  
ルイのパーティに合流。

**ルイ**

本作の主人公。転生時に得た  
スキル〈創造〉を生かし、  
異世界で第二の人生を歩む。  
裏切りと理不尽ことが大嫌い。

**エレノア**

犬の獣人族の女の子。  
ルイの仲間兼恋人  
として共に旅に出る。

**マリア**

エルフが治めるフォール王国の  
元第二王女。家出して  
ルイの仲間兼恋人となる。

や し ま か え で  
**屋島楓**

地球上ルイの  
クラスメイトだった  
空手少女。彩花と共に  
ルイのパーティに合流。

## 《プロローグ 目覚める者》

穏やかな時が流れる、広い広い空間。

見渡す限りにさまざまな樹木や草花が所狭しと生い茂っており、その色とりどりの光景は見た者の目を楽しませ、心を豊かにさせることだろう。

実りに実った瑞々しい果物を食したならば、万人が舌鼓を打ち、歓喜溢れる表情を浮かべるに違いない。

また、どこからともなく吹く、花の匂いを内包した穏やかな風に、誰しもが自然と笑みを浮かべてしまうはずだ。

まるで何かの物語に出てくる幻想郷のような、悠久の時の流れを感じさせるそんな空間に、何を  
するわけでもなく歩き続ける存在がいた。

——彼女の名前はローラ。

エルフ族であるローラは、永い年月をずっと彷徨<sup>さまよ</sup>っていた。ただただ歩くばかりで、彼女自身な  
ぜ歩いているのか理解していない。その証拠に、時折首を傾げることが彼女の癖<sup>くせ</sup>になっていた。

明確な目的がないまま、今後もずっと一人、この空間で過ごし続けるかに思われたローラ。だが今、彼女は目を見開いて驚愕した。

この空間において永遠にも感じられる時を過ごしてきた中で、初めて見せた表情だ。

幻想的な風景もすでに心に響くことはなく、常に無表情で過ごすローラがこのように動揺したのは、一体いつ以来だろうか？

(あれは……)

驚きに次いでその顔に表れたのは、喜び。頬を緩ませた彼女は、見つけた存在に向かって一直線に歩き出す。

ローラが足を止めたとき、その足元には一人のエルフ女性が横たわっていた。

女性は穏やかな顔で、規則正しい寝息を立てている。風が靡かせた自身のブロンドヘアが柔らかく鼻にかかった。

ローラは草の上で寝ている女性の横に腰掛け、まるで壊れ物であるかのように慎重に、指で女性の頬に触れる。

そしてそのまま手を添えてゆっくり頬を撫でつつ、口を開く。

「初めて人に会ったわ。この子も私と同じで、耳が尖っているのね。ふふ、それにしても声を出すなんていつぶりかしら。ねえ、あなたはだあれ？ どうして私と同じ耳をしているの？」

寝ている女性からは当然返事はない。それでもローラは、柔らかそうな唇を動かし続ける。

「髪の色は私と違うのね。私はシルバーだけど、あなたはブロンド。それに私の髪より艶があつて凄く綺麗。顔もとても綺麗で羨ましい。私の顔はわからないけど、きっとあなたのほうが綺麗でしょうね。ふふふ」

この空間には、ローラの姿を映してくれる湖などはなかった。

しかし、ここにいる限り、ローラは空腹に悩まされることも、喉の渇きに苛まれることもない。

「ねえ、あなたはどこから来て、どうしてここにいるの？ 私はわからないの。あなたはわかる？ 私は気が付いたらここにいたのよ。何があつてここにいるのか、なんのために私はここに存在しているのかもわからないわ……あなたが起きたら、もしかして私に教えてくれるかしら？」

確実に声は届いていても、未だ目覚めない女性。

それでも構わずローラは話し続ける——自分以外の存在にずっと飢えていたかの如く。

「私の名前はローラっていうのよ。あなたの名前は？ 幸い時間だけはたっぷりとあるし、あなたが起きるまで私はここにいるわ。無理に起こしたりしないから安心して？ こんなことを言ってもあなたには届いていないのでしょうか。ふふふ」

ずっと無表情で過ごしてきたのが嘘のように、ローラは目元を緩ませる。時折、彼女の口からは無意識に笑い声が漏れていた。

しかし、やがて明るかったローラの顔が少し暗くなる。

「でも……あなたも私と同じかもしれない。自分の名前以外に記憶がないかもしれないわね……」

ねえ、私たちはなぜここにいるの？ 私はなぜ自分の名前しかわからないの？ ここは一体どこなの？ 私の心にぼっかりと開いた穴は何？」

途中から嘆き<sup>なげ</sup>を込めた声色に変わりながら、ローラはそのまま独白を続けた。

「この喪失感は何？ 私は何を失ったの？ こうしてあなたを見つけるまでの間、私は永い永い時を一人で過<sup>すご</sup>してきたのよ。私にはすることがないし、一箇所に留まるのは落ち着かなくて、でも歩くくらいしかすることがないのよ？ 嫌になっちゃうわ」

ため息をついたローラは、眠る女性の顔を優しく持ち上げて自身の太ももの上に乗せる。

そして慈愛<sup>あまのり</sup>がこもった視線で女性を見つめた。

「あなたは私の希望になるのかしら？ ふふふ、そんなわけないわよね……もしそうならどんなに嬉しいかわからないわ。私はずっとずっと歩き続けることに……この喪失感がなくならないことに……疲れてしまったのよ。これから先、私はどうすればいいのかな？ これからもずっと同じことの繰り返し？」

ローラの目から一滴の涙が流れる。それが彼女の頬を伝い——女性の額に落ちた。

——それが呼び水になったのか、女性に変化が現れる。

今まで規則正しく動いていた胸の動きが、不規則なものへと変化していく。

そして、寝返りを打つかのようにその身をよじらせた。

その反応を見たローラは、少しだけ慌てて声を出す。

「あ、あら？ もしかして起きるの？」

「ん、ん……」

ローラの言葉に反応するかのように、女性の口から少し艶っぽい声が漏れ出た。

さらに、ゆっくりゆっくりとまぶたが開き、光を反射した美しい緑色の瞳が揺れ動く。

女性は上半身を起こし、首を動かして周囲の観察を始めた。

それが終わると、今度はローラに向き直り、口を動かす。

「あなたは誰？ そして……ここは……一体どこなの？」

「おはよう。私はローラよ。ここがどこなのかは、残念ながら私にもわからないわ。ごめんなさい」

軽く頭を下げたローラに対し、女性は平坦な声で言葉を続けた。

「そう……あなたにも……ここがどこなのかわからないんだ……」

女性の反応を見たローラは気落ちしてしまう。しかし、めげることなくまた口を開く。

「あなたも私と同じなのね……ううん、おそらくそうなんじゃないかって思ってたじゃない。大丈夫、うん、大丈夫よ」

ローラは自身に言い聞かせるかのように呟いた後、女性に問いかける。

「わからないと思うけど、一応聞くわね。あなたはなぜここにいたの？」

すると、女性は少しだけ考える素振りをしてから、眉をひそめながら答えた。

「わからない……なぜ私はここにいるの？ 私が今起きたというのは理解できるけど、寝ていた理由も、意識を失ったのがいつなのか、思い出せない……」

「そう……ところで、あなたの名前を覚えてくれる？ 私と同じなら……多分、名前だけならわかるんじゃないかしら？」

さらに落ち込んでしまったローラだったが、女性を見つめながら再び問いかけた。女性はいくの間、自分の記憶を探り、そしてローラに視線を合わせて唇を動かす。

「名前……私は……私の名前は——リサ……そう、私はリサ」

リサはそう呟き、視線をローラから外して、ぼんやりとした眼で虚空を見つめた。

## 《1 ステアニア帝国へ》

ミドガル王国に攻め入ってきたステアニア帝国を蹴散らして、戦後処理などのためにミドガル王城へ行っていた俺——ルイは、転移魔法【ワープ】で拠点の宿屋に戻ってきた。

周りの風景が変わってすぐ、俺は素早く視線を動かして周囲の確認をする。

それと同時に抱きついてくる恋人たち。

前後左右、身体に至る所から柔らかな感触が伝わってくる。改めて状況を確認すると、左からエ

レノア、右からマリア、前から楓<sup>かえで</sup>、そして後ろから彩花<sup>あやか</sup>とアイリがぎゅうぎゅうと押してきていた。

「思ったより遅かったね？ 皆、ルイルイが帰ってくるのを今か今かと待ち構えていたんだー」

「ご機嫌なのか少しトーンが高いマリアの声が聞こえたと思ったら、次は彩花の声がする。」

「類<sup>るい</sup>が帰ってきたとき、誰が最初に抱きつけるか勝負してたんだ。勝者は類と二人つきりで一日デートよ！」

「そうなのです！ 負けられない戦いをしてたのです!!」

「勝てませんでした……」

さらに、気合の入ったエレノアの声がしたかと思えば、意気消沈した物言いのアイリが続く。

「今のは誰の勝ち？ 私的にはエレノアとマリアがほぼ同時かなあ？ まあ、ここは類君に判定してもらおう！」

楓がそう言うが、最近はずいぶん誰とも二人つきりで出掛けるなんてことはほとんどなかったし、近いうちにそれぞれとデートしなきゃいけないだろう。

まあ、それもこれも、ステアニア帝国からリサの母親のレシアさんと妖精族の女王ティターニアを救い、そしてリサを封印した『エルフ王族から堕ちた者』のスキルについて調査してからだな。

それにしても、皆さつき風呂に入ったばかりだから、とてもいい匂いがする。それに彼女たちの肌はきちんと手入れされているので、きめ細かくつやつやしており、触れると気持ちいい。

って、今はそんなことを考えている場合じゃない。俺は理性を総動員して、なんとか気持ちを落

ち着ける。

「ただいま」

まずは帰ってきた挨拶をして、皆からも「おかえり」との言葉をかけてもらった後、俺に引付いてきていない面子<sup>めんづ</sup>を流し見る。

召喚獣のフェンリルとファフニールはベッドの上で横になって休み、精霊のシルフィとノームはフェンリルの上に乗って毛に埋もれていた。石動<sup>いずるぎ</sup>はソファーに座っていて、リサの父親であるリベロさんはテーブルで紅茶を飲んでいる。

リベロさんも風呂に入ったみたいで、帝国の奴隷にされていた頃の埃<sup>ほこり</sup>っぽさがなくなっているな。あー、俺も風呂に入りたかったけど、今は時間がないから洗淨魔法の【クリーン】で我慢するか。

「思ったより奴隷の譲渡なんか時間がかった。さて……皆、少し離れてくれるか？ リベロさんの前だとさすがに少し恥<sup>はづか</sup>ずかしいし、なによりこのままだと話にくい」

俺が苦笑しながらそう言うと、恋人たちはしぶしながら離れてくれた。

自由になった俺は、リベロさんの正面に座る。

当然、帝国にはリベロさんも連れていったほうがいいよな。んー、あとは……あのことを伝えておくか。

「マリアとエレノアは、ジョージの屋敷を覚えてるか？」

「覚えているのです！」

「うんー」

「そうか。今回の戦争の褒賞で、あれを取り壊して俺たち用に新しく屋敷を建設してもらえることになった。早めに工事してくれるみたいだし、出来上がったらそこを俺たちの拠点にしよう」

女性陣はこの話をきやーきやー言いながら喜んでくれている。

「さて、皆の用意は終わってそうだし、さっさと帝国に行つて目的を果たすとするか。リベロさんも用意はいいか？」

「ああ」

力強く頷きつつ返事をしたリベロさんは、拳を握りながら椅子から立ち上がった。

俺は彼に視線を合わせたまま一つ頷く。

「転移するから、全員俺に掴まってくれ。リベロさんも俺の身体のどこかに触れてもらえるかな？」

「わかった」

リベロさんが俺の背後に回り、背中に手を置いたのを感じた。

女性陣も俺の腕や肩や背中に接触する。そういえばマリアも【ワープ】が使えるようになってるんだよな。今はいいとして、今度マリアにも使わせるか。

「よし……目的地は、帝国の首都スタラバヤだ。行くぞ！ 【ワープ】！」

そう叫んだ直後、俺たちは帝国にある『木漏れ日の宿』近くの広場に立っていた。

ここには以前俺、エレノア、マリア、アイリ、そしてリサと泊まったことがある。宿屋を見て一

瞬リサのことを思い出すも、俺は首を振ってそれを頭から追い出す。今はやることがある……

さて——人通りを避けようとの広場に転移してきたのだが、それでも辺りには何人か住民がいたようで、いきなり現れた俺たちは目立ってしまったていた。

彼らはこちらを指差しながら騒ぎ始める。

「お、おい！ 今あいつらいきなり現れたぞ!？」

「な、なんだ？ あ、あれは転移の魔法か？」

「ん？ 黒髪の子がいるじゃないか。第九騎士団レオニアの人たちか？ 少し前にお披露目<sup>ひろめ</sup>を  
してたよな」

「確かにそうだな。レオニアの人たち以外に黒髪の人なんて見たことないし……これはどういうこと  
とだ？ 彼らは今ミドガルに攻め入っているはずじゃ……」

「ミドガル王国への出兵には転移魔法を使ってみたんだし……まさかすでにミドガル王国を滅ぼし  
てきたのか？」

何人かは見当違いなことを言っているな。それと、エレノアら人間以外の仲間に侮蔑<sup>ぶべつ</sup>を含んだ視  
線を向けてきているが、ただの住民であるこいつらに攻撃を加えるわけにもいかない。

うざったいが我慢だ。これがステアニア帝国のデフォルトだしな。

がやがやとうるさい奴らの横を通り過ぎながら、俺はステアニア帝城を見やる。

ここからなら一〇分も歩けば到着できるだろう。

俺たちの影響もあつて喧騒<sup>けんそう</sup>にまみれた大通りを皆で進んでいく。

それにしても……やはりスタラバヤは、ミドリアに比べて人が多い。

その中には人族、獣人族、エルフ族、ドワーフ族、そして以前は見掛けなかった魔族の奴隷たち  
がいる。まさに、奴隷制度を推進しているこの国らしい。

もうすぐ城門というところで、前方から黒い服装で黒い頭巾をかぶった者たちがやってきた。

さっきから俺たちを観察している者の気配を感じていたが……ここで姿を見せたか。

それを目にした楓が叫ぶ。

「あれはダークラス隊よ！ この国で最も恐れられている部隊だわ」

彩花と楓は、確かこのダークラス隊つてのに助けられたことがあるんだったな。それは同時に、  
S級冒険者のクロスたちに騙されていたリサとアイリが解放されるきっかけになったという。

皆を手で制した俺は、ダークラス隊から視線を外さずに口を開く。

「あっちから何かをして来たら返り討ちにするけど、まずは話してみるか」

視界の隅で皆が頷いて賛成してくれたのを見てから、俺たちはダークラス隊に近付いていく。

数秒後、相手と俺たちの距離は一〇メートル程まで縮まった。

相手の人数は二〇人。俺は今示し合わせた通りにまず一言かけて、相手の反応を窺<sup>うかが</sup>う。

「俺たちはこの先に用がある。通してくれないか？」

すると、集団の中から一人が進み出てきた。

「この道は帝城へと続いている。そう簡単に通すわけにはいかない。さて……俺の見間違いないかなければ、そこにいるのはアヤカ・テンドウ、カエデ・ヤシマ、マナミ・イスルギだな？ そいつらと一緒にいるということは、お前が『ルイ』か？」

「ああ、そうだ。俺のことを知っているのか？」

「ふつ、帝国の諜報部隊は有能だからな、当然知っているぞ」

「そのようだな。まあ、俺のことはいいとして、お前らはダークラス隊なんだろう？ ちょうどよかった、お前らに聞きたいことがあるから、大人しく答えてくれるとありがたい」

こいつらは帝国の暗部だという。ならばレシアさんのことを何か知っている可能性がある。

「俺たちが素直に従うとでも？」

奴らのうちの一人がそう答えた後、後方から一人の男が出てきた。

「やあやあ！ 君がルイだね」

突然の陽気な声に、俺は眉をひそめる。しかし、その男は構わず言葉を続けた。

「ファームラン王国の大会では、キースを赤子扱いして君が優勝したんだって？ あいつの強さは他国にも鳴り響いていたし、彼をあつさり殺せる者などこっちにはいないから、できれば穏便に話し合いたいものだ。それにしても……仕事だったとはいえ、あのときは君たちを助けてあげたのになあ。まさかこんな男を連れてくるなんてねえ。これぞ恩を仇で返すところかな」

軽薄な口調のその男は、そう言つて彩花と楓を指差す。

それに対して彩花が口を開いた。

「その声……あなたはロウガね？」

「やあ、アヤカ・テンドウ。以前は俺を『ロウガさん』って呼んでたのに、随分と強気になっちゃって」

「ふん、あのときの私たちは誓約の腕輪をはめられていたじゃないの。確かにあなたには助けられただけ、そのお礼は言つたはずよ」

「そうよ！ それにもともと、帝国が私たちを無理やり召喚したんじゃないの！ まあ、私とあやにとつてはそれが嬉しいことに繋がったんだけどね」

楓は後半部分を小声で言つた。こっちに来て俺と会えたことを喜んでるのだろう。

そして再び彩花がロウガに言う。

「あなたが私たちを召喚した結果が、今の状況よ。ミドガル王国へ攻め入った軍がどうなったのか——あなたの立場ならすでに知っているんじゃない？」

「一応聞いてはいるね。そこにいる雌犬に、俺たちの隊長が世話になつたらしいねえ」

ダークラス隊の副隊長だというロウガ。飄々とした男で、第一印象に悪感情はなかったが……今の言葉は聞き捨てならない。

「雌犬だと……!? それはエレノアのことを言っているのか？」

隊長というのは、きっとエレノアが戦場で取り逃がした奴のことだ。

そしてエレノアは、ステアニア帝国で蔑視されている犬の獣人族である。ロウガの言葉がエレノアのことを指しているのは明確だ。

話し合いをするにも、こちらがペースを掴む必要がある。怒りを少し発散することも兼ねて、俺は一気に魔力を練り上げてこう口にした。

「【グラビティステイフル】」

ダーククラス隊の頭上に黒いモヤが発生して、それがロウガ以外の者たちに一気に襲い掛かる。異変に気が付くより前に、ダーククラス隊の奴らは意識を刈り取られた。

今のは魔法レベル9の〈重力魔法〉。その気になれば、ミンチになるレベルの超重力で相手を圧殺できる。

「うわ……エレノアを馬鹿にされただけで、問答無用で制圧するんだ？ 類君さすがだね！」

なぜか楓がキラキラした目で俺を見ている。いや、エレノアのこととも当然あるけど、ペースを掴みかけたただだからな？ わざわざ敵前で言うことでもないの口には出さないが。

さて、ロウガの反応を見てみると――彼は口を大きく開けて放心状態になっていた。

気絶させた奴らの強さはそこそだったみたいだし、それが一切反応できずにこうなれば、この態度も頷けるか。

「おい、ロウガ！ 今のは相当威力を抑えた魔法だ。それを踏まえてお前に聞きたいことがある。正直に答えてもらおう。もし嘘をついたら……お前がどうなるかはわからないぞ？」

できれば恫喝はしたくないが、これもレシアさんのためだ。一番情報を持っていそうな副隊長のロウガをわざわざ残したんだし、大人しく情報を寄越してくれると助かるんだが。

少し間を置いて放心状態から立ち直ったロウガが、顔面蒼白になりながら口を開く。

「ふうー。参った参った。キースが赤子扱いと聞いていたからどれほどのものかと思っていたら、こんなにとはね」

ロウガは両手を大袈裟に上げて、反抗する意思はないとジェスチャーした。

「さっきは雌犬なんて言ってすまない。まさかあの一言だけでこんなに怒ると思わなかったよ。君と敵対する気なんてなかったのに！ 俺は帝国生まれの帝国育ちだから獣人を見下すのは癖になっ  
ていて、ついつい口が滑ってしまった。次からは気を付けるとしよう。さて、俺が知ることなら  
んでも答えようじゃないか。もちろん嘘は言わないぜ。君は絶対に怒らせちゃいけない存在だっ  
てことが身に染みてわかったからね」

なんでも答えてくれるとか、随分と軽い奴だな。まあいい。とりあえず話を進めよう。

「こっちにはありがたい話だが、随分と決断が早いじゃないか。お前は結構重要な立場にいるんだ  
ろう？ そんなにあっさりと口を割っていいのか？」

「俺が帝国に従っているのは、この国が絶対的な強者だからなのさ。俺自身も結構な強さを持つて  
いるけど、さらに強者の庇護があればできることが色々増えるし、なにより楽しいだろう？ 今も  
興味本位で来てみたんだ。今回ばかりは相手が悪かったってだけだ」

こいつは結構な修羅場<sup>しゅらば</sup>をくぐってきたみたいで、こうして話している間に精神を立て直したらしい。その証拠に、顔色がすでに普通に帰っていた。

ロウガはステアニア帝国や皇帝に絶対的な忠誠心があるわけではないという。念のため〈真偽〉スキルで確かめても、その言葉に嘘はない。作ったばかりのスキルだが、いい感じに役立ったな。

こいつに〈真偽〉スキルが通用したのは幸いだ。こうやってちまちま使っていて、早めにスキルレベルを上げたいところだ。

ロウガを鑑定したところ、こいつは楓より少し弱いくらいで、〈短剣術〉を得意としていた。過去の楓なら瞬殺されただろうが、現在は俺の〈統率〉が効いているし、装備の違いもあり、楽勝だ。「お前が答えてくれるなら俺はそれでいい。で、ステアニア帝国がミドガル王国を偵察に行った際、エルフ族の男女一組を奴隷にしたはずだ。その男性は俺の後ろにいる人で、女性のほうの居場所を知りたい。情報はるか？」

俺の質問を聞いたロウガは肩をすくめる。

「なんだ、そんなことかい？ その女ならついさっきまで帝城の牢獄に入れられていたねえ。今頃はトラン伯爵の屋敷に向かっている途中だろう」

「伯爵？」

「そうだ。彼の奴隷好きは有名だ。だから陛下が功績のあったトラン伯爵に褒美として女をお与えになられた。そこにいる男はカツヤ・ソラキに与えられたはずだが、敗戦したみたいだし、ソラキ

はもうこの国に戻ることはなさそうか……」

俺はロウガの言葉に頷き、さらに問いかける。

「トランの屋敷はどこにある？ 聞きたいことはもう一つあるが、まずはトランのところに行くことを優先したい」

「はいはい、わかったよ。まあ、この程度なら誓約の腕輪も反応しないしな。帝国や皇帝陛下に敵意があるわけでもないからね」

後半は悪態をつくように言い放つロウガ。

と、ここでリベロさんが話に割り込んでくる。

「ルイ君！ 早く行こう！」

彼が焦る気持ちは理解できる。レシアさんは俺にとっても大事な人だし、俺は笑顔で頷く。

「よし、すぐにトランの屋敷に向けて出発だ。この際だ、屋根の上を走って最短距離を行こう。ロウガ、最速でトランの屋敷に向かえ！ 俺たちはお前に着いていく！」

ロウガは肩をすくめながら「やれやれ、人遣いが荒いな」と言い残すと、一瞬で屋根に上がって駆けていく。

このスピードだと、彩花と石動、アイリは少しギリギリになりそうだな。

そう判断した俺は、即座に【サモンワールド】からフェンリルとファフニールを呼び出した。

虚空に黒い渦<sup>うず</sup>が現れ、中から二匹が出てくる。

「フェンリル！ 彩花と石動とアイリを乗せて俺たちに着いてこい！ ファフニールは気絶している奴らを目立たない場所に置いてきてから、俺たちと合流だ」  
「がるる」

ファフニールの元気な声を聞いた俺たちは、遠目に小さく見えるロウガを追って駆け出した。

◇ ◇ ◇

俺たちではできる限り屋根に被害を出さないよう走っていき、しばらくしてロウガが立ち止まった。辺りを見渡すと、大きくて立派な屋敷が一軒だけ立っており、人通りもまったくない。閑散とした道には砂埃が舞い上がっていた。

こんなに目立たない場所に屋敷があるのには、トランが奴隷好きつてのが関係するのだろうか？

「ここがトランの屋敷か？」

俺たちから少し離れた場所にいるロウガに確認してみる。

「そうだ。ここに来る途中で伯爵の馬車を二台見かけたから、本人はまだ屋敷に到着していないとみて間違いない。そうそう、彼は奴隷と一緒にの馬車に乗らないことで有名だから、その女が道中に何かされるつてことはないはず。最初に言われた通り屋敷まで来たけど、街中で襲うのとどっちが良かった？」

そう言い終えたロウガは、どこか嗜虐的しやくやくてきに見える笑みを浮かべている。こいつは有能なんだろうけど、掴みどころがなさすぎるな。

それに相当打算的な人物だと思う。そんな性格を考えると、やはり自分の命がかかっていると思えばこそその行動か。

こいつは今のところ嘘は言っていないし、これならレシアさんの貞操はまだ無事だろう。

「ああ。確実にここに来るのであれば問題ない」

どうやって救出するか。正面から迎え撃つか……もしくは、屋敷を占拠しておくか？ 少し考えて、俺は結論を出す。

「屋敷にいる面子が俺たちに敵うとは思えないが、到着したトランに挟撃されるのも面倒だ。俺がここに残って様子を見ておくから、誰かに屋敷を占拠しておいてもらいたい。リペロさんとロウガは俺と一緒にいてくれ。さて、誰が屋敷に行く？」

「そういうことなら任せて！ さっさと制圧してくるね」

一番に立候補した楓が屋敷に駆けていき、続けてアイリと石動も反応する。

「ルイ様！ 私も行ってきます！」

「私も行く」

いつの間にか俺の足元に来ていたフェンリルの頭を撫でながら、俺は二人の返事を了承する。アイリと石動は俺に頷き返すと、屋敷に向かった。

楓が無茶をしないか少し心配だ。戦争では結構暴れたみたいだしなあ。

「ね、ねえ、類、私も行ってくるね。楓がやりすぎないか心配だから」

そんな俺の不安を読み取ったのか、彩花がそう言い残し、三人を追いかけていった。

エレノアとマリアは落ち着いた顔でトランの屋敷を眺めている。リベロさんは少し不安気だ。

「リベロさん、レシアさんは必ず助け出す。だから安心してほしい」

「あ、ああ。すまない。ありがとう。ルイ君に心配をかけてしまったようだね」

リベロさんの返答に、俺は首を横に振った。

## 《2 レシア救出に向けて》

少しして——屋敷のほうから騒音が届き、外堀が崩れ落ちた。屋敷と外堀を同時に破壊とか……終いには悲鳴が聞こえてくる。

「なかなか暴れてるようだね。トラン伯爵は奴隷をイジメるのが好きでねえ。人に言えないようなこともしていたからこんな辺鄙な場所<sup>へんぴ</sup>に屋敷を立てたんだと思うけど、今回はそれが仇になったね。これだけ目立てば、本来なら警備隊や他の貴族が来てもおかしくなかったよ」

ロウガの言葉に顔が引き攣<sup>ひきつ</sup>るのを感じつつ、俺は苦笑を漏らす。

屋敷のことは任せたのだから、彼女たちを信用しよう。目の前の光景の変化に少し戸惑いながらも、俺はそう考えた。

リベロさんは口をパクパクさせていたが、エレノアとマリアは至って普通の顔のままだ。

それから一〇分程度が経過した後、トランの屋敷は全壊していた。

さすがにここまでになるとは思わなかった俺は、天を仰<sup>おほ</sup>いでため息をつく。

どうしてこうなった……占拠と全壊はまったく違うだろう……屋敷の中で待っていて、帰ってきたトランに「ここはもう占拠したぞ」って言う予定だったんだけどな。

「はあ」

エレノアとマリアも苦笑いしている。

「これからどうするの？」

マリアに言われて考える。こうなると、辛うじて残っている外堀の陰に隠れていて、隙を見てレシアさんを救出するのが一番か。

隠れなくてもいいかもしれないけど、今の彼女の状態がわからないし、少しでも時間が稼げるなら稼ぐべきだ。

「ご主人様、ため息はダメなのです！」

「はは、そうだな。とりあえず彩花たちの戻りを待って、それから行動しよう」

俺がそうエレノアに答えるのとほぼ同時に、楓、石動、アイリが駆け足で戻ってきた。

「類君、ごめんね……全壊させる予定はなかったんだけどさ……」

「ごめんなさい」

「すみません。私もです……」

楓、石動、アイリはそれぞれが悪そうな顔で謝罪してきた。

俺としてもどうしてこうなったのか気になったので、話の続きを促す。

「実はあの屋敷で地下室を見つけたの。そしてそこには、四肢が欠損して胴体を鎖で繋がれたまま放置されている獣人族やエルフ族の死体が六人分あったわ。全員隷属の首輪をしていたから、奴隷で間違いないわね」

報告してくれている楓は拳を強く握りしめており、手から血が滴っている。

「地下室には、拷問具と思われる器材も沢山ありました。私たちが到着したとき、ちょうどこの屋敷の使用人や護衛らしき人たちがその死体を片付けている最中でした」

アイリがそう補足してから、また楓が報告を続ける。

「類君、ごめんなさい。私、どうしても怒りを抑えることができなかった。死んでいた奴隷たちの中には、まだ一〇歳くらいの子もいたの……皆、苦痛に歪んだ顔をしていたわ……」

「あの伯爵は奴隷を甚振るのが趣味だからねえ。地下室がそうだったのは当然かなあ」

ロウガの軽薄な物言いが気に入らなかったのか、楓は思いつきり彼に殺気をぶつける。

「おっと、ごめんごめん。言い過ぎた。カエデ・ヤシマ、そんなに怒らないでくれよ。怖い怖い。」

俺は事実を述べただけなんだからさあ」

「言い方ってものがあるでしょ！ 本当にステアニア帝国は腐ってるわ！」

今にも襲い掛かりそうな勢いで楓は言う。

「この国は人族至上主義、かつ、弱肉強食を体現している国だからねえ。帝国がここまで大きくなったのも、ひとえに強者ゆえのことだしさ」

ロウガが言うように、ステアニア帝国がここまで大きくなった発端は、容赦なく妖精族を狩り尽くしたからだ。だから、この国には妖精女王ティターニアが囚われているかもしれない。

しかし、トランはどうしようもないな。年端もいかない子どもたちさえ残虐に殺すのか。

そういえば、楓のブレーキ役をしてくれると思った彩花はどこだ？

「彩花はどうした？」

「あの子は今お墓を作っているわ。〈土魔法〉で穴を掘って埋葬するくらいの簡素なものだけだね。手伝いはいらなから先に類君に報告してきてって言われたの。『多分、屋敷が崩壊したのを心配してるだろうから』だって」

「確かに……彩花は冷静なところもあるな」

それにしても、まさかそんなことがあったとは。悲しそうな顔をしている楓に、俺はさらに問う。  
「それで、地下室でかち合った屋敷の人間はどうした？」

「もちろん潰したわよ？ だってしょうがないじゃない……」

「そうか……まあ、仕方ないな。そいつらは無理やりトランに従わせられていた可能性もあるが……それでも……」

やり切れない気持ちになっていたところ、ロウガが口を挟む。

「あー、ステアニア帝国の市民の中には、奴隷の獣人族やエルフ族に対して憐れみの心を持つ者も、極々少数ながらいることはいるけどさ。残念ながら貴族の関係者にそんな人たちは皆無だね。むしろ率先して甚振る奴らが多いかなあ。まあ、伯爵の趣味の妨げにならない程度にだと思うけど。本格的にやったらトラン伯爵から罰せられるからねえ。『人の趣味を取るな』って」

国の主義と言えはそれまでだが……あまりの非道ぶりにやるせなさを感じてしまう。

しかし、俺が見も知らぬ相手に対してこんな気持ちになるなんて……

暗い雰囲気の中、マリアが手を叩いて全員の注目を集めてから口を開く。

「ところで、そろそろ移動したほうがいいと思うよ。もうすぐトランが来るんじゃない？」

「そうだな。彩花と合流して、トランが来るのを隠れて待とう」

作戦と言える程上等な考えではないが、俺は全員にそう伝えた。

屋敷の敷地内に入って少し歩くと、目を閉じて両手を合わせ、祈っている彩花の姿を発見した。

「彩花……黙祷を邪魔して悪いが、そろそろ隠れよう。トランたちを一網打尽にしないと」

俺は決意を込めて彩花に伝える。レシアさんを救助した後、トランは放置してもいいかなと思っ

ていたけど、こうなってはもう無理だ。

殺されてしまった奴隷たちと縁もゆかりもない俺にトランをどうこうする権利はないし、傲慢だとは思うけど……

俺は、俺の顔色を窺っているリベロさんに告げる。

「安心してください。レシアさんは絶対に助け出しますから。そして、トランたちは——」

俺はそこで一度言葉を句切り、皆の顔を見回してから低い声で言う。

「——皆殺しだ」

結局俺たちも、俺たちの邪魔になる奴らや、許せない奴らを殺している。だから自分たちが正義だとか、相手が悪だとかは思わないし、思っただけなのと思う。

それでも……それを呑み込んででも、先に進む決意をしたんだ……リサが消えたあの日に……

「よし、あそこの扉の下に潜もう」

ロウガも含めて、全員で移動を開始。ロウガのことは、フェンリルが警戒してくれているから安心だ。何か変な動きを見れば、『重力魔法』で一気に押し潰してくれるだろう。

数分後、土埃を上げながら二台の馬車がやってきた。箱型の馬車にはゴテゴテした派手な装飾があり、如何にも悪趣味な感じだ。

御者が屋敷の異変に気が付いたのだろう、何かを叫んでいる。

馬車の扉がスライドして開き、でっぴりした男が顔を出す。そいつも何かを叫び、それと同時に馬車がスピードを上げた。

崩れ切った外塀の近くに到着した馬車は、急激に速度を落とし、二台並んで停車する。

先頭の馬車から降りてきたでっぴりした男は、すっかり狼狽<sup>ろうばい</sup>していた。まさに悪徳貴族といった風貌で、ジョージのほうがまだマシだった。

俺は振り向くことなく、後方にいるロウガに問う。

「ロウガ、あれがトランで間違いないか？」

「ああ。あれは間違いなくトラン伯爵だ。間違いないよねえ。あの体型はさ？」

声量を落としての回答を聞いた俺は、ロウガに注意をしておく。

「わかった。この期に及んでお前が何かするとは思わないが、余計な真似はしてくるなよ……もしそうした場合は、どうなるかわかるだろう？」

「おお、怖い、怖い。わかってるって。俺も命は惜しいからねえ」

ロウガは両手を上げて降参のポーズを取る。

そんな言い合いをしている最中、後ろのほうの馬車から、隷属の首輪を装着させられた一人のエルフ女性が降りてきた。

俺は即座に、彼女に〈鑑定〉をかける。つてかトランにもそうすればよかったか。

エルフ女性がまさにレシアさんだとわかった俺は、リベロさんに目を向ける。

彼は目に薄らと涙を浮かべながらレシアさんを見つめていて、今にも飛び出していきそうだった。そんなリベロさんの様子を見た際、アイリも俺の視界に入ったのだが、彼女は何かを思案中のような素振りを見せている。

この屋敷に来たときから何かを考えていたみたいだったが……何かあるのか？　だが、何かあるにしてももう時間がない。アイリのことは後回しだ。

俺は再びトランたちに目を向け、戦力分析を試みる。

二台の馬車を囲むようにしている馬に乗った護衛が三〇人。彼らを〈鑑定〉したところ、全員が中堅のAランク冒険者程度の実力があるとわかった。トランは結構いい護衛を雇っているな。

まあ、所詮Aランク——と言いつつ、俺もAランクだが。

レシアさんのすぐ近くにも護衛が六人。まとめて魔法で潰すと彼女に返り血がかかる恐れがあるし、あそこまで密集していると【ワープ】を使っても間に割り込めない。

「なぜ私の屋敷がなくなっているのだ！　おい！　お前ら！　どういうことだ！」

トランの喚き声<sup>わめきこゑ</sup>を無視し、俺は皆に作戦を伝える。

「マリア、ちよつとトランの気を逸らしてきてくれるか？」

「いいよー！　行ってくるねー」

マリアが一気に駆け出したのを見送り、俺は説明を続ける。

「万が一はないと思うが、皆も油断しないでレシアさんから目を離すな」

皆が頷いたのを確認し、マリアの様子を窺う。

マリアはトランから一〇メートル程離れた所に躍り出て、口を開く。

「やあやあ、そこのおデブちゃん！　ブタならブタらしく四足歩行をしなきゃダメじゃないか！！  
二足歩行なんて生意気だよ！　あ、ところで僕の言葉はわかるかな？　理解できているならきつと  
新種のブタだねー」

さすが煽<sup>あお</sup>って注目を集めるのが得意なマリアだ。

そのままマリアは問答無用で魔法を放つ。それは弱めの【ダウンバースト】で、トランを押し潰  
さない程度に威力が抑えられている。

「そうそう、そんな感じ！！　いいね、それで四足歩行だね！　ほらほら、歩いてブヒブヒ鳴いてみ  
てよ！」

「な、なんだ、お前は誰だ!?　これは複合魔法か!?　ぐうううう」

「『ぐうううう』じゃなくて、ブヒイイイだよ！　やり直し!!」

思惑通りにマリアの毒舌が炸裂。しかし、まさか四足歩行させるためだけに【ダウンバースト】  
を放つとは思わなかった……

トランの護衛たちが呆けている様子を見た俺は、今がチャンスだと一気呵<sup>いっき</sup>成<sup>かせい</sup>に出る。

一瞬でレシアさんの近くにいた護衛の前までたどり着き、拳を振り抜いて全員の頬を殴打。

彼らの首は一八〇度回転してしまったのですぐに死ぬだろうが、出血はさせないで済んだ。首が

千切れないように力加減が上手くいき、俺は内心自画自賛する。

六人の護衛を一気に屠<sup>ほろ</sup>った俺は、レシアさんの肩を掴んで――

【ワープ】――

マリアの後方へと一緒に転移。レシアさんは突然の出来事に動揺しつつも口を開く。

「な、な、何？　今のはもしかして転移魔法？　え？　え？　あ、あなたは誰？　あの口が悪いエ  
ルフの子は仲間？」

パニック状態のレシアさんに答えるより先に、俺は魔法を唱える。

【リリース】

レシアさんに装着されていた隷属の首輪が外れ、リベロさんが叫びながら駆け寄ってきた。

「レシア！　レシアー!!　無事だったか？」

「え!?　リベロ？　あなたなの？　これは一体どういうこと？　どうしてここにあなたが？」

「助けに来たんだ！　何かされなかったか？」

「本当に？　夢じゃないのね……隷属の首輪が外れたのはなぜ？　一体何がどうなってるのよ！

ええ、私は何もされてないわ!!」

リサの両親がお互いを抱擁<sup>ほうよう</sup>し合う。レシアさんは絶賛混乱中のようなだが、徐々に状況を噛み砕き  
つつあるのか、目に涙を浮かべている。

二人が再会できて良かった。リサ……リサの両親は無事だったよ。

そんな風に感傷に浸っていると、仲間が暴れているのに気が付いた。見た限り、任せていて問題ないと判断した俺は、レシアさんに話しかける。

「レシアさん。俺はルイ、リサの恋人です」

リベロさんから離れたレシアさんは、俺に向き直って口を開く。

「リサに恋人がいたの？ あの子は生きているのね？ もしかしたらダラスで起きた謎の爆発に巻き込まれたんじゃないかって心配してたのよ」

「い、いや……レシア……聞いてくれ——」

リベロさんが俺をフォローしてくれようとしているのを察した俺は、彼に話したときのように、リサの状況を正直にレシアさんに伝えることにする。

「すみません。リサは今いない。とある事情で封印されてしまつて、助けられるのか、再び会えるのか不明で……全部俺の責任なんだ……」

言い終わると同時に頭を下げようとしたが、それはリベロさんによって阻止された。

放心した様子のレシアさんだったが、徐々に落ち着きを取り戻し、また口を開く。

「そう。そうなのね……今の様子を見ると、リベロは事情を知つてそうね。私にも教えてもらえるかしら？」

「ああ。ここでは落ち着いて話せないから、後でルイ君から聞いた話を全部伝える。リサからルイ君に宛てた手紙の内容も教えていいよね？ ルイ君」

「ああ。これからリベロさんたちを希望する場所に送る。俺たちにはまだ帝国であることがあるから、また戻ってくる」

リベロさんは俺に頷き、レシアさんも微笑んだ。

「あなたはルイというのね。事情を聞くまでなんとも言えないし、なんて言えばいいかもわからない。だけど、リベロの様子を見る限り、あなたは信用できる人だと思うわ。そしてあなたは私を救ってくれた。多分、リベロのことも救ってくれたんでしょ？ 本当にありがとう」

頭を下げてきたレシアさんに、俺は慌てて返事をする。

「あ、頭を上げて！ 俺は……当然のことをしたただけだから！ リサの両親は俺にとっても大事な存在だ」

自分の言葉に気恥ずかしさを感じた俺は、咄嗟に二人から視線を逸らす。チラッと横目で二人の様子を窺うと、二人とも温かい目で俺を見ていた。

場所は悪いが、優しい空気に包まれているを感じる。それに、さっきまでうるさかった周囲が静かになってきた。

「成敗！ なのです！」

「ルイルイ、あと残ってるのはこのブタだけだよー！ こいつはどうする？」

「類！ こいつらは絶対に許せなかったから、私も暴れちゃった……」

「類君！ こっちは粗方終わったよー！」

「終わった」

そんなエレノア、マリア、彩花、楓、石動の声が順番に聞こえた後――

「ああああああ!!」

アイリの絶叫が響き渡った。

### 《3 後処理》

アイリの絶叫を聞いた俺は、一体何かと一気に警戒態勢に入る。

しかし、注意深く周囲を見渡しても、特に危険があったりするわけではなさそうだった。皆も何があったのか理解できていない表情だ。

アイリだけが何かに気付いたってことか？

「アイリ、いきなりどうしたんだ？」

俺が問いかけると同時に、アイリは少し離れた所で四つん這いになっているトランに向かっていき、延髄蹴<sup>えんすいげ</sup>りを見舞う。

トランはその一撃で気絶したみたいで、泡を吹いて倒れた。

冷気がこもっているような瞳でトランを一瞥したアイリは、すぐに俺たちのほうに戻ってきて口

を開く。

「この男が、クロスとアーシャに奴隷狩りの依頼をした貴族です。クロスたちに裏切られて奴隷にされたショックやルイ様に二度と会えない絶望で記憶が薄れていたのですが、あの二人がトランの名前を口にしていたのを思い出しました」

は？ マジかよ！ こいつのせいで、リサとアイリは一時とはいえ奴隷になっていたのか。

「アイリ、それは本当なの!？」

「ええ、マリア様。間違いありません」

それを聞いたマリアは【ダウンバースト】の威力を強めた。気絶したトランの身体から、みしみしと骨が軋<sup>きし</sup>むような嫌な音がする。

このままだとべしやんこになると危惧<sup>きぐ</sup>した俺は、すぐさまマリアに言う。

「マリア、それ以上やるとトランが潰れてしまう！ 本当だとは思いますが、一応トランからも事実確認をしておこう」

「わかったよー。とりあえずこの辺で勘弁しておくね」

「ああ、すまないな」

マリアが【ダウンバースト】を停止させると、今度は俺がトランに魔法を使う。

【ハイヒール】

俺は魔法で回復させたトランに近付き、軽いピンタを数発食らわせて目を覚まさせる。

目を見開き、わかり易く驚愕しているトランに向かって、俺は言い放つ。

「お前は無駄なことをしゃべるな。俺の許可なく口を開くなよ」

「ひ、ひ、ひい、な、なんだ!? お前たちはなんなんだ!？」

「うるさい。黙れ!」

再びトランの頬を平手で打つ。出来物が多くて汚いこいつの顔にはあまり触りたくないが、しょうがない。

トランは怯えを隠しめせず、肉で埋もれてしまっている首を一生懸命縦に振っている。

「お前に聞きたいことがある。正直に答えないと……そこらに転がっている骸と同じ運命をたどるぞ」

俺は周りの肉塊を指差し、トランにそう伝えた。

「ひい、私の護衛がああ! ——ぐあつ」

トランがまた勝手に叫んだため、俺のビンタが炸裂。

はあ、俺はビンタするにも慎重に気を遣ってるんだぞ? 軽く軽くやらないと、首が一八〇度回るからな。きつと俺の努力はこいつに伝わらないと思うが……

「これ以上、俺の許可なくその臭そうな口を開くなよ。じゃあ、聞くぞ? お前はクロスとアーシャという名前に覚えがあるか?」

「あ、あるぞ! 私はその者たちに依頼もしていたというのに、なぜか最近連絡が取れないんだ!

せつかく依頼をしてやったというのに……まさかお前たちはクロスたちの居場所を知っているのか?」

こんなにあっさりと口を割るとは思わなかったな。こいつは馬鹿なのか? 正直者なのか? ただ単に怯えているだけって可能性も捨てきれないな。

アイリがクロスから聞いた話と今の発言から、リサとアイリが奴隷になったのはこのトランのせいだと確定した。

さてさて、こいつはどうしてくれよう?

「ああ。俺は二人の居場所を知っている。そういえば、アーシャについては俺より詳しい奴がいたんだっけ? なあ、ロウガ」

一瞬考えたような素振りを見せたロウガだったが、すぐに口を開く。

「ああ、あいつね。あの子はもう壊れたから、すでに魔物の餌になったね。ってことでアーシャの居場所は魔物の胃袋の中! あつ、結構前のことだし、もう消化されてるはずだから、厳密にはそうじゃないかな。それにしても、奴隷狩りは一応禁止されているんだけど、トラン伯爵は奴隷狩りをしてたのか。まあ、怪しいとは思ってたけどね」

ロウガは心底楽しそうな笑みを浮かべながら、アーシャの顛末を語った。こいつ、結構危ない奴なんだな……

「クロスのほうもすでに死んでいる。ロウガに殺されたようだぞ」

「あの二人が死んだだど!? あいつらはSランクの冒険者で、実力は確かだったはずだ!」

「そうだねえ、クロスはダークラス隊の俺が殺してやったよ。強さは大したことなかったなあ」

「お前はダークラス隊の者なのか!? 貴様、なぜこんな奴らと一緒にいるんだ! お前も帝国の一員なら早く私を助けるのだ! こいつらを殺せええ——痛い痛い」

教育がなっていないうるさいトランに、俺はまたビンタをかます。

「皆、こいつはどうしたらいいと思う?」

「俺なら魔物に食べさせるかなあ」

「お前は……そんなに魔物に食わせるのが好きなのかよ……」

「そうだよ! 俺の趣味とも言える!」

ロウガの悪趣味に付き合う必要はない。こいつのことは放っておいて、と……

皆それぞれ思案中のようで「うーん、うーん」と唸っている。

拷問の末に殺された奴隷たちのことや、リサとアイリを奴隷にしようとしたことを考えたら、俺たちがトランを憎む気持ちはいかなりのものだ。だが、次はティーターニアを助けに行かなければならないから、あまり時間をかけていけない。

「本当は生き地獄を味わわせてあげたいと思うけど、これでいいんじゃない? 【アースチェンジ】

突如マリアが魔法を使用した結果、トランの足元に直径三メートル程の穴が開く。

「ぎゃああああ」

当然、トランはその穴に落下。覗き込んでみると、深さは一〇メートル程度だった。落ちた痛みで気絶したみたいで、奴は動かない。

トランを〈鑑定〉して持っているスキルを見る限り、一人で上ってくるのは不可能だろうし、ここに閉じ込めておくってことか?

「これで仕上げだね。〈アースチェンジ〉」

マリアが再び魔法を使い、穴の入り口はほぼ閉じた。開いているのは直径一センチ程度。

空気穴だけ残したところか。これはマリアの優しさか? わからないな。

「マリア、さすがなのです! とても良い案なのです!」

「でしょー?」

マリアを褒めるエレノアに、ドヤ顔のマリア。

「餓死するまで充分に苦しめばいいのです。マリア様、ありがとうございます」

溜飲が下がったのか、アイリが笑顔でマリアにお礼を言った。

トランはマジックバッグとかも持っていないかったし、奴の屋敷は壊滅していて、人通りも少ない。トランが生きているうちに誰かが見つけないだろう。

「これでトランのことは終わりにしよう」

一件落着とばかりに、俺はリベロさんとレシアさんに向き直る。

彼らは顔を引き攣らせていたが、俺の視線に気が付くと表情を取り繕う。

「トランはリサのことも奴隷にしたし、相当あくどいことをしていたみたいだから、あの扱いも仕方ないだろう」

「あ、ああ。大丈夫だ。皆なかなか思い切りがいいからビックリしたただよ。う、うん、大丈夫。少し驚いただけさ。トランに同情もしていないしね」

「私はまだ詳しく知らないけど、ここにいる女の子たちはたくましそうでいいわね」

リベロさんとレシアさんの返答に頷いてから、俺はまた口を動かす。

「さて、二人をどこに送ればいい？ 俺が行ったことのある場所であれば魔法を使って送れるが」

「では、とりあえずミドリアに連れていってくれるかな。そこでゆっくり休みながら、今後の予定を考えようと思う」

「わかった。ところで、どうしてミドガル王国なんだ？」

俺はリベロさんに問いかけたのだが、答えたのはレシアさんだった。

「私たちはしばらくの間、世界中を回って旅をしてきたわ。今回みたいなのが起きたのが旅のせいだと思わないけど、少し疲れちゃってね。そろそろゆっくりしたくなったの。リベロから聞いた話だと、ミドリアはすでに戦争の脅威もなくなつて安全らしいじゃない？ それに以前あそこに行ったことがあって、差別とかもなく住みやすい所だつて知っているのよ」

「うん。まあ、先立つ物がないからギルドで軽い依頼を受けながらだけだね。ギルドカードは帝国に没収されてしまっているけど、幸いにしてギルドですぐに再発行できるから」



お金については俺が余らせてるから、リベロさんたちに渡したいが……帝国に来る前に聞いたときも援助はいらなくて言っていたし、ここで再度言うのも話を長引かせてしまうだけか。続いてレシアさんが口を開く。

「再発行手数料くらいなら、その辺で魔物を倒して素材を持ち込めば稼げるし、大丈夫よ」

この二人は強いし、本当に問題ないのだろうと判断する。

「それじゃあ送るから、二人とも俺の肩に——」

言っている途中で、この場はマリアに【ワープ】を使ってもらったほうがいいなと気が付いた。ここにはロウガがいるからな。フェンリルもいるとはいえ、俺が目光らせておこう。

〈直感〉スキルの感覚では、何か起きるという感じはしないのだが、人は考えが変わる生き物だ。どこでどう変化するかわからない。

なにせ、ロウガはついさっきまで敵だった男だし、そもそも味方というわけじゃない。そんな相手を残して俺が離れるわけにはいかないだろう。

マリアを見ながらそう考えていると、俺の視線を疑問に思ったのか、彼女が口を動かす。

「ん？ ルイルイどうしたの？ 送っていかないの？」

「ああ、予定変更だ。マリアがリベロさんたちをミドリアまで連れていってあげてくれ。俺は——」

ロウガに視線を移してから、俺は一旦句切った言葉が続ける。

「念のためロウガを見張ってよう」

「ああ、そういうことね。了解！ 僕に任せて！ リベリベ、レシレシ！ 行くよー！」

苦笑しているロウガに構わず、マリアが明るい声で転移を引き受けてくれた。

さらに、リベリベとレシレシという呼び方を聞いたリベロさんたちは啞然<sup>あぜん</sup>としている。

「リベリベとレシレシ！ 固まってるで、行くよ！ ほらほら早くー。私の肩に手を置いてね！」

どこかぎこちない動きで、リベロさんたちはマリアの言う通りにする。

「じゃあ、行ってくるよ。すぐ戻るからねー！ 【ワープ】！」

マリアの魔法が発動し、三人は俺たちの前から消えた。

この後は、ロウガをどうするかだな。

ロウガは心からステアニア帝国に忠誠を誓っている感じはしない。むしろ好きなことができるという理由でこの国にいるみたいだから、今後多少は利用できるだろう。

「ロウガ、お前の誓約の腕輪を外すから腕を出せ」

「へえ、やっぱりこれを外せるんだ？」

ロウガは自分の腕輪を指差しながらそう口にして、さらに言葉が続ける。

「アヤカ・テンドウたちがしていたはずの誓約の腕輪が見当たらないから、変だと思ってたんだよねえ。聞いても教えてくれなさそうだから、聞かなかったけど」

こいつなら気が付くか。帝国の暗部として活躍していたくらいだし、結構目ざとい奴なのだろう。俺はロウガに近寄っていき、差し出された腕を掴んで腕輪の上に手のひらを置く。

「リリース！」

取り外した腕輪は【アイテムバッグ】に保管しておく。ロウガは今まで腕輪がはまっていたところをさすっている。

そこへ、頼み事をしていたファフニールが戻ってきた。

ファフニールは俺に突進してきて、褒めてほしそうに頭を胸に擦りつけてくる。だから俺は何度も撫でてあげた。

この国は物騒だし、ファフニールはこのまま出しておこう。シルフィたちはまだ【サモンワールド】の中で待機でいいかな。危ない雰囲気を感じ取れば勝手に出てきて、俺たちのパーティの中で防御力が低めの子を守ってくれるだろう。

ファフニールは俺に甘えるのに満足したのか、次はフェンリルとじゃれ合って遊び出す。

少しの間二匹を見て心を和ませていると、少し離れた場所に魔力の揺らぎを感じた。

そして虚空からマリアが現れる。

「ただいまー！」

「おかえり」

「おかえりなのです！ マリアは【ワープ】が使って羨ましいのです！ 私も早く使えるようになります！」

俺とエレノアに続き、皆もマリアに声をかけたのだった。

#### 《4 ステアニア帝城へ》

「ルイルイ！ 僕たちがいたミドリアの宿屋に二人を送り届けて、ついでにシャンプーとかの使い方も教えてきたよ」

「ああ。ありがとう」

さて、これで帝城に向かえるな。ロウガから情報を引き出しておくか。

「ロウガ、ステアニア帝城にいる戦力はどれくらいだ？」

「はあ、答えるしかないかあ。ダークラス隊だと隊長のハヤテ様と隊員が五〇人程度。リネガル様がまとめている魔法騎士団が三〇〇人前後。第二騎士団もいると思うけど、そっちは人数不明かな」

「万単位でいると思ったら、そうでもないんだな」

「それはそうでしょ。この国に攻めてくる国家なんて基本的にないし、ほとんどの騎士団は国境近くの砦を守っているから。今言った戦力があれば基本的に事足りるし、リネガル様は転移魔法を使えるから情報の伝達も早いしね」

それもそうか。帝国は軍事力が相当あるけど、その分版図が広いから守るのも大変なんだな。

「君みたいに転移魔法がある敵は厄介だけど……前提条件として、使い手は相当少ない。不確定要素が多い危険のために国境近くの守りを疎かにしたらそれこそ……ね？ あ、君たちが返り討ちにした軍隊も、少し前まではこの国に常備されていたけどね」

言われてみれば、来るか来ないかわからない転移魔法の使い手が必要以上に警戒して、他国に侵略されてしまえば元も子もない。

それでも、今回俺がこうして来てしまったことは、運がなかったと諦めてもらう。

「よし、このまま城に乗り込むぞ。立ち塞がる相手には容赦しないでいいが、必要以上にやりすぎることもない」

ロウガと一緒にいたダーククラス隊も、気絶で済ませたしな。こっちから攻め込んで殺すっていうのは、やはり少なからず抵抗がある。

とはいっても、もし俺の仲間が帝国に捕らえられている状況であれば、その限りではないが。

「よし、また屋根の上を走って最短距離で行く。ファフニールは飛んでこい。行くぞ！」

しばらく移動して帝城近くまで着いたら道に降り、俺は楓に話しかける。

「意外と気が付かないもんだな」

「そりゃあ、皆身体能力が高いから。そうじゃなかったら普通に目立ってると思うよ？」

「そうだな。よし、城に入るときはロウガに任せるぞ」

「はいはい、どうせ抵抗したら酷い目に遭わされるんだよね？」

「ああ」

ロウガはため息をつくが、心底嫌がっているようには見えない。根本的に性格が気ままなようだ。俺はロウガからステアニア帝城に視線を移して見上げる。

この中のどこかに、皇帝であるレオンがいるはず。敵の兵もできれば殺したくないが……まあ、出たとこ勝負か。

続いて仲間たちに目を向ける。それだけで、全員が頷いてくれた。それを受けて、俺は無言のまま城へと足を踏み入れた。

「おい！ お前らは何者だ!? ここをステアニア帝城と知っていて来たのか？ お、おい……エルフ族に獣人族もいるじゃねーか！ それになんだ、その見たこともない狼に龍は！ 首輪をしているところを見るとタイムされているようだが、城内に入れることはできないぞ！」

この門番が俺たちの正体を看破していないことから、ファフニールに運ばれていったダーククラス隊から情報は漏れていないと見える。

もともとレシアさんの救出にはそれ程時間を取られていないから、それも当然か。

門番の侮蔑の視線がエレノアやマリアに突き刺さる中、それを遮るようにロウガが前に進み出る。「やあやあ！ 警備の仕事頑張ってるねえ。俺はダーククラス隊副隊長のロウガ。皇帝陛下の密命で、俺はこの人たちを客人として連れてきた。だから警戒しなくてもいい」

「ほ、本当ですか!? 私たちは何も連絡をいただいていないのですが……」

「はあ? お前は俺の言葉を疑うのか? どうやら死にたいらしいな」

「ひ、ひいい、す、す、すみません! どうぞお通りください!」

きちんと仕事をしようとしていた門番は正しい。しかし、この世界は理不尽が溢れているから、どうしようもない……

同情しなくもないが、こいつはエレノアたちに失礼な真似をしたからなあ。

そんなやり取りがあった後、俺たちは無事に城内に入ることができた。そしてロウガに案内されるがまま、しばらく進む。

途中でそこそこ兵士を見かけたが、ロウガを見るとすぐに離れていく。この男の権力は相当なものなのかな?

歩きながら城内を観察すると、アースで一番大きな国だけあって、ミドガル王城以上に高価そうな装飾品や調度品が並べられているし、造りも美しい。

俺はふと思いついて、地球育ちの彩花、楓、石動に話しかける。

「彩花たちはここにしばらく住んでいたんだし、この辺を通ったことはあるのか?」

「この辺はないかな。楓と愛美は?」

「全然記憶にないから、来たことはないと思う」

「私もない」

俺たちの少し前を歩いていたロウガにも、今の話が聞こえたのだろう、振り返りもせず話に加わってくる。

「なくて当然。この辺は余程の地位じゃなければ立ち入れない区域だから。さて、もうすぐ皇帝陛下の私室に到着するんだけど……ここまで不自然なまでに警戒されていなかったよね。だから多分――」

ロウガの言葉が突如途切れ、その瞬間に空間がぶれたのを感じた。

今まで通路を歩いていたはずなのに、俺たちが今いる場所は大広間になっている……?

「ああ、やっぱりね」

ロウガは一人、納得顔で頷いていた。

「何があった?」

「この場所は、本来の造りであれば大広間なんだ。けどいつもはそれを、リネガル様が作った魔道具の力で通路にしているんだよ。で……あそこ、ほら、ね?」

そう言っただけでロウガが指差した先には、三人の男が立っていた。

フルプレートアーマーを着用している一人は、エレノアが戦ったというハヤテで間違いない。

その横にいるのは、片手に杖を持ち、紫を基調とした一見布製に見える気品が溢れる服を着ている男。彼が着用している服は俺たちと同様、見た目通りの防御力ではなさそうだ。髪の色は服と同じ紫で、顔立ちはいいほうである。